

「馬執宏家御願関係史料」保存修復報告

上江洲 安亨*1 宮城 誠*2

1. はじめに

修復対象史料は、(財)海洋博覧会記念公園管理財団首里城公園管理センター所蔵「馬執宏家御願関係史料」である。

平成21年9月から平成22年3月までの期間、監督職員を上江洲安亨とし、修復保存作業ならびに報告書作成は宮城誠がこれを行った。

史料は、弁財天御宝前、千手観音御宝前、勢至御宝前、園比屋武御嶽への御願関係文書4枚、「御願書」と表題され、千手観音御宝前、弁財天堂御宝前への御願関係文書2枚の合計6枚で、いずれも一紙物である。「御願書」と表題された2枚は、元は1枚だったものが継ぎ目で外れている。

全体に薄茶変色し、虫損、欠損、フケ、カビ、シミ、折れ、シワ等が見られ、本紙の劣化が著しいため修復が必要となった。

2. 史料の状態

1) 形状及び寸法

修復前後の寸法は以下の通りである。

「敬白 弁財天御宝前」 No.1

(1) 修復前寸法 (写真1)

縦 32.4 cm
横 45.5 cm



写真1

(2) 修復後寸法 (写真2)

縦 33.3 cm
横 47.3 cm

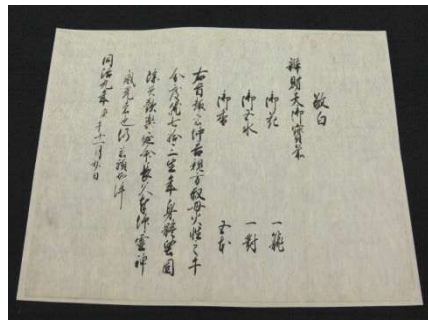


写真2

*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 係長

*2 紙修復保存工房

「敬白 千手観音御宝前」 No.2

(1) 修復前寸法 (写真3)

縦 32.3 cm

横 45.4 cm



写真3

(2) 修復後寸法 (写真4)

縦 33.3 cm

横 47.1 cm

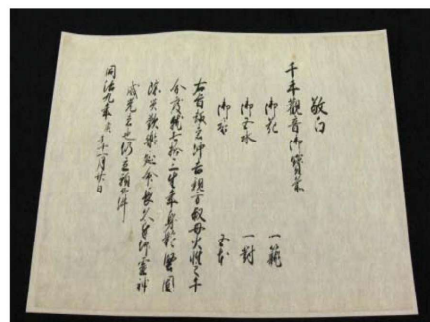


写真4

「敬白 勢至御宝前」 No.3

(1) 修復前寸法 (写真5)

縦 32.3 cm

横 39.2 cm



写真5

(2) 修復後寸法 (写真6)

縦 33.2 cm

横 41.0 cm

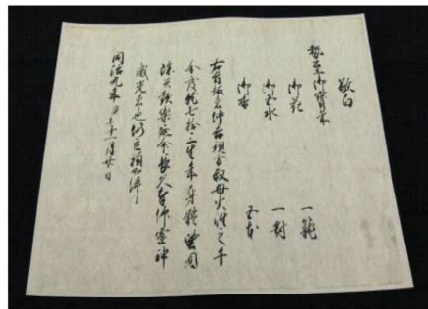


写真6

「敬白 そのひやぶ御嶽御いへ御前」 No.4

(1) 修復前寸法 (写真7)

縦 32.3 cm
横 43.5 cm

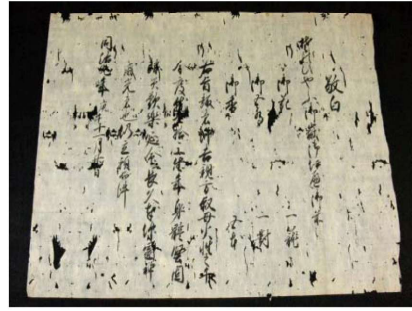


写真7

(2) 修復後寸法 (写真8)

縦 33.3 cm
横 44.7 cm

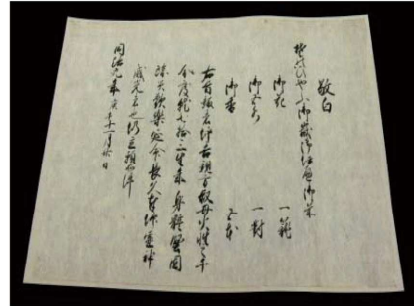


写真8

「御願書」 No.5

(1) 修復前寸法 (写真9)

縦 33.3 cm
横 65.7 cm (全体の長さ)



写真9

(2) 修復後寸法 (写真10)

縦 34.1 cm
横 66.5 cm

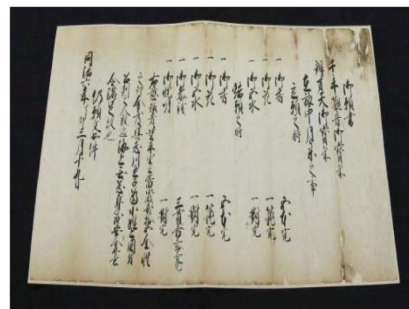


写真10

「御願書」 No.6

(1) 修復前寸法 (写真 11)

縦 33.3 cm

横 120.5 cm (全体の長さ)



写真 11

(2) 修復後寸法 (写真 12)

縦 34.3 cm

横 61.3 cm



写真 12

3) 修復前の状況

- (1) 本紙はいずれも全体に薄茶変色し、虫損、欠損、フケ (写真 13)、カビ (写真 14)、シミ、折れ、シワが複合的にみられ、劣化が著しい。



写真 13



写真 14 本紙の裏面

写真 13 フケ(劣化により紙の繊維がほぐれて綿のようになる状態)の箇所

写真 14 フケとカビが発生している箇所

(2) 本紙の裏面に付着物があり、周りのシミが表までしみこんでいる。(写真15)



写真15 本紙の裏面

4) 繊維組成試験

本紙の料紙特定のため、高知県立紙産業技術センター^{*3}に繊維組成試験を依頼した。

試験の結果は以下の通りである。

繊維組成試験は日本工業規格(JIS)に規定されている紙、板紙及びパルプ—繊維組成試験方法(JIS P 8120)に基づいて行い、繊維画像は光学顕微鏡(株)ニコン製 エクリプス 80i)を使用した通常の観察状態及びJIS規定のC染色液による染色状態の2通りを撮影した。

繊維組成試験による結果は全てコウゾ繊維である。

コウゾ(学名: Broussonetia Kazinoki、英語名: paper mulberry)はクワ科の雌雄同株の落葉低木または草本であり、栽培が可能で毎年株から出る枝を採取し皮を剥いだ韌皮を製紙原料としている。

コウゾに似て、同様に製紙原料となるカジノキ(学名: Broussonetia Papyrifera Vent.)もあるが、これは雌雄異株であって植物学上種類が異なるが、製紙用繊維としては同一視されている。製紙におけるコウゾの歴史は古く、正倉院の文書や図書類の中に登場し、927年頃に完成した「延喜式」にはコウゾを「殻」と表現し製紙原料として使われているという記録がある。

コウゾ繊維の形状は繊維の幅方向に節のような模様をもち、繊維幅は一定ではなく広狭な部分を多く持っている。また、繊維の先端は青矢印のように尖らず丸みを帯びている。コウゾ繊維の特徴は赤矢印で示した薄皮である。周囲に薄膜が存在しているが、クワ(桑)繊維や青檀繊維の一部にも確認される。その他の繊維には見られないため、コウゾ繊維であるかどうかの判断材料の一つになる。

(写真16)

「敬白」2点について

通常、コウゾ繊維の繊維長は平均的に10mm前後であり、他の和紙の繊維に比べて長めだが、今回の分析試験では、繊維長が1mm程度と短い繊維も確認された。その短い繊維の端面は赤矢印のように鋭利な刃物で切断されているような形跡が確認される。No.3は切断されたコウゾ繊維のみで構成されていると思われるが、No.1は切断したコウゾ繊維と切断していない通常のコウゾ繊維が混合されていると推測される。(写真17)

*3 高知県立紙産業技術センター 製紙技術課 チーフ 遠藤恭範氏

コウゾ繊維を切断して和紙を製造すると、通常のコウゾ和紙のように柔らかく隙間の多い和紙ではなく、堅く締まった(密度の高い)和紙となる。元来、切断したコウゾ繊維はトロロアオイ等の粘剤が見つかる以前に、流し漉き技法ではなく溜め漉き技法による和紙製造に用いられていた。

紙片の分析のため、溜め漉きなのかは未確認だが、繊維組成試験からは溜め漉き技法により製造された和紙の可能性も考えられる。(修復対象史料は全て溜め漉き)

なお、一般的に切断したコウゾ繊維に通常のコウゾ繊維を混合して製造する事例は今まで確認することがないため、もしもコウゾ和紙の裏打紙が用いられていたならば、本紙と裏打紙が年を経て一体化してしまい、一緒に採取してしまったとも考えられる。(これについては、分析対象史料には裏打ちや貼り紙はないため該当しない。)紙を漉く際、厚みが足りない場合などに裏打ちすることもあるため、その可能性も考えられる。また、原料が不足したため、古いコウゾや古紙を混ぜた経済的な理由も推測される。

繊維長が 1mm程度のもを用いるのは、密度が高まり文字が書きやすい、裏写りが少ない紙をつくることができるためである。

写真 16 No. 6 の繊維を C 染色液で染色した状態 (倍率 100 倍)

青矢印は先端が丸みを帯びている繊維
赤矢印はコウゾ繊維の特徴である薄皮

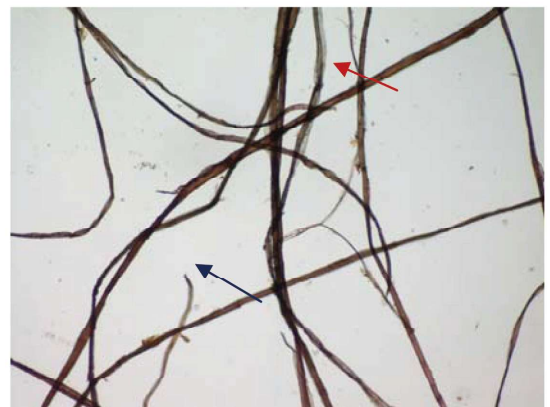
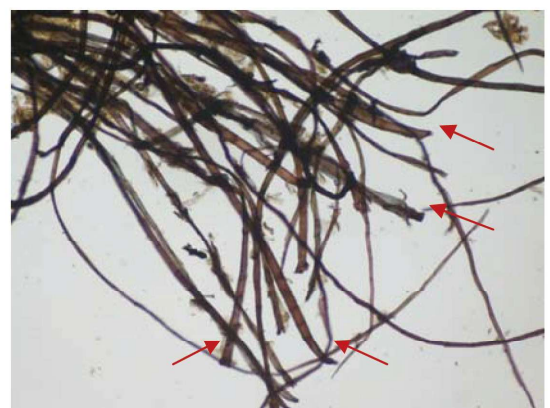


写真 17 No.1 の繊維を C 染色液で染色した状態 (倍率 100 倍)

切断した繊維と通常の切断されていない繊維の混合と推測される

矢印は切断された繊維



3. 修復方針

修復前の調査に基づき以下の修復方針をたてた。

- 1) 料紙特定のため、高知県立紙産業技術センターに委託し繊維組成試験を行う。
- 2) 虫損、破損等には本紙の紙質に適した材料を用いて修復する。
作業の際には、修復用小麦澱粉糊を使用する。
- 3) 収納箱として桐箱を新調する。

4. 修復仕様

- 1) 修復前の本紙全体の劣化状態を記録するため、写真撮影を行った。
- 2) それぞれの本紙の劣化状態を詳しく記録した。
- 3) ハケによりクリーニングし、折れ・シワをのばした。
- 4) 継ぎ目で外れているものは糊代が残っているため、元の通りに継ぎ戻した。
- 5) 史料はリーフキャスト(漉きばめ)により修復した。この技法は、本紙の虫損、欠損部分に紙の繊維が充填されるため、本紙の厚みを増すことなく仕上げる事ができる。材料は修復用パルプ(長期保存に適した高知県産靱皮繊維)を使用した。(写真 18, 19)
本紙が脆弱しているものには、必要に応じて修復用極薄和紙(3.5 g/m²)を用いて補強した。
修復後はボードに挟んでプレスし、ボード替えを繰り返して徐々に空気となじませながら乾燥した。



写真 18

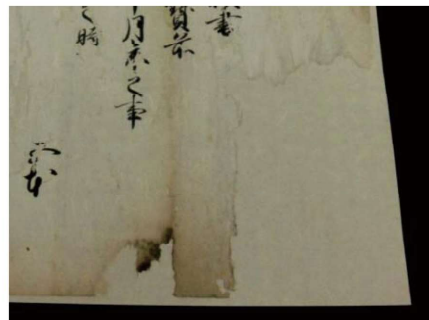


写真 19

- 6) 本紙が劣化しているため、担当者と協議の上、余白をつけて裁断した。
元は折られていたと思われるが、伸ばしたままで仕上げた。
- 7) 史料の寸法に合わせて桐箱を作製した。

5. 結び

沖縄は歴史・文化・地域的に特徴があり、貴重な史料も多いため注目される要素が多い。その事柄を記した文字だけでなく、紙自体も時代を映す大切な情報と捉え、紙の姿を後世に伝える事もまた重要である。各家・県外・国外には知られざる史料もまだまだたくさんあると思われ、そういう史料を探す事も興味深い。